

心理臨床における「遊ぶこと」に関する一考察

— 第三項という観点から —

皆本 麻実

1. はじめに—Winnicott と「遊ぶこと」—

「遊び play」は、心理学に限らず、哲学、社会学、文化人類学等、種々の分野において扱われてきた魅力的な研究テーマのひとつである。この「遊び」を、とりわけ心理臨床の治療実践において重視してきたのは、紛れもなく Winnicott, D.W. (1896~1971) であろう。彼は、Klein, M. の対象関係論の流れを汲みつつ、独自の精神分析を実践してきたが、小児科医でもあった彼の理論は、その多くが子どもの治療を通して生まれたと言える。そんな Winnicott の治療論を語る上で、「遊ぶこと playing」は不可欠であり、中核を担っている要素のひとつであろう。

Winnicott は精神療法における「遊び」について、以下のように説明している。

“精神療法は 2 つの遊ぶことの領域、つまり、患者の領域と治療者の領域が重なり合うことで成立する。精神療法は一緒に遊んでいる 2 人に関係するものである。(中略) 遊ぶことが起こり得ない場合に、治療者のなすべき作業は、患者を遊べない状態から遊べる状態へ導くように努力することである。” (Winnicott, 1971/1979)

ここからは、「遊び」というのは精神療法を語る一種の比喩であったとも考えられるが、Winnicott にとっては、精神療法の営みはまさに「遊ぶこと」そのものであったのだろうとも想像される。この Winnicott の「遊ぶこと」という表現は、斬新なアイデアであるが、一方では、難解で謎めいている。Ogden (1986/1996) は、Winnicott のアイデアは極めて喚起的で暗喩的であり、探求や拡張することが難しいことを指摘している。その一方で、Winnicott の場合、他の書き手とは異なり、彼自身の言葉で書かれたアイデアから始めるということが決定的に重要であることも認めている。そこで Ogden (1994/1996) は、Winnicott の理論の本質を損なわずに Winnicott の表現を探求する方法として、弁証法という観点から Ogden 自身の言葉で Winnicott 理論の新しい道筋を示すことを試みた。Ogden のこのような視点も参考にしながら、本論においては、Winnicott の「遊ぶこと」、また「遊ぶことの領域」という表現に重きを置きつつ、それらがどのようなことを言い表しているのか、その心理臨床的意義を、第三項に関するこれまでの諸理論という新しい観点から捉え直してみたい。

ここで、第三項という捉え方をすることについては、以下のような説明からも有用であると考えられる。Winnicott (1971/1979) は、“遊ぶことは、内側 inside という言葉をどのように使っても、内側にあるのではない(中略) また、それは外側にあるのでもない”，つまり、「遊ぶこと」がある

種の中間的な性質を帯びているものであると主張している。これに留まらず、彼の理論の中には「中間」に着目したものが実に多い。広く知られた「移行対象 transitional object」と「移行現象 transitional phenomena」や、「潜在空間 potential-space」、また「ほどよい母親 good-enough mother」という、この“ほどよい”という表現にも、Winnicott 独特の「中間」の捉え方の表れが見て取れるだろう。これら Winnicott の概念には、“人間としての生活の第3の部分”としての“内的現実と外的生活の双方に貢献する体験すること experiencing の中間領域”(Winnicott, 1971/1979)へのまなざしが通底しているように思われる。これらの、「中間」への着目は既に、外界と内界、母と子、また治療者とクライアントといった対の存在が前提として含まれており、その対によって産み出される副次的なものという性質が付与されかねない。しかしながら、ここでその前提から一旦距離を置き、対を基本としつつも、心理臨床の中で全く新たに到来するものとして第三項的に「遊ぶこと」を捉え直すことを通して、その考え自体の持つ独自の意義に迫っていきたいと考えた。

以上のような要点を踏まえて、本論では、これまで心理臨床の世界で様々な議論されてきた第三項についての諸理論を取り上げ、それらの考えと突き合わせる中で見えてくる Winnicott の「遊ぶこと」の心理臨床的意義や、限界について考察していく。

2. 心理臨床における第三項

心理臨床学は、フロイトに始まる精神分析の精神内界の力動の探求などの一人の心理学、そして、治療者とクライアント、母と子などといった二者の心理学を基礎に発展してきた歴史がある。例えば、アメリカの精神分析学界においては、患者の心を一つの実体とみなし、それへの働きかけによって患者が変容する一方治療者は変わらないという one-person model から、患者と治療者を一つの対とみなして、両者の心の変容を想定する two-person model、ないしは、relational model へと急速に移行している(和田, 1996)。

その一方では、第三項へのまなざしは、心理臨床学のこれまでの変遷の中で、着実に注がれ続けてきた。例えば、Freud, S.によるエディプス・コンプレックス理論では、母子関係という密な二者関係に、まったく新しい第三の人物である父親が子にとって心理的に立ち現われてくる際の子の内的葛藤を見事に描き出した。このように、第三項は、心理学のこれまでの発展の中に必然的に現れてきた重要なトピックであると思われる。以下に、心理臨床における第三項に関しての諸理論を概観していく。

2-1. 精神分析における第三項

精神分析においては、先述のエディプス・コンプレックス理論や、意識と無意識の関係など、第三項というテーマについては、数多く論じられてきたと言える。第三項的な捉え方のできる一例としては、Freud (1919/2006) の『不気味なもの』が挙げられる。Freud は、“不気味な unheimlich”という単語は、“馴染みの heimisch”の反対語であるが、heimisch は unheimlich と重なり合う意味をも表し、両価性に向け意味を發展させたもので、“unheimlich であるとは、どのようにしてか、ある種 heimlich である”と説明する。“不気味なもの”はまさしく、この単語の対から生じる、ぞっとさせ、不安や恐怖の感情を引き起こすが、元々の unheimlich と他 heimlich と他重なり合う新たな第三項と言えるだろう。

また、冒頭にも挙げた Ogden (1994/1996) による “The Analytic Third (分析の第三主体)” との捉え方は、現代の精神分析における第三項の理論として代表的であろう。Ogden の思想の中核にあるのは、「主体」についての弁証法的な解釈である。彼は、フロイトの構造論における自我、エス、超自我が、相互に規定し合う弁証法により成り立っているという考えを提示しており、ここでの「主体」は、その三項が“打ち消し合い、保ち合うやりとりによってつくられる、弁証法的に構成された体験の統一という立体的な錯覚の中に位置づけられる”としている。そして、このような体験から打ち出される主体性を“体験する「私性」(experiencing “I-ness”)", つまり絶えず流動し、進展する性質の存在を認めようとした。Ogden (1994/1996) は、分析プロセスが分析家、被分析者、分析の第三主体の三つの主体性の相互作用を反映するものであると指摘した上で、分析の第三主体が“分析家と被分析者が創りだすものであるが、同時に(分析家と被分析者としての)分析家と被分析者は、分析の第三主体によって創りだされるものでもある”としている点は興味深い。分析の第三主体が“創りだすもの”と“創りだされるもの”とを弁証法的に繋ぎ合わせているものと考えられる。それは、Ogden (1994/1996) が、分析の第三主体は静的な実体ではなく、絶えず流動していく状態にあり、分析家と被分析者によって産み出されるさまざまな理解、つまり解釈によって変形を受ける発展途上の体験として想定されるものとするなど、流動性や変化の可能性を強調していることから窺える。この点に関して、藤山(2001)は、治療者が行うべきことは、この分析の第三主体に人間的な形を与えることであり、その前提として自らの主体的体験と間主体的体験の交流を十分に受け取り、味わうことであると考え、それによって、分析の第三主体の体験が“生きた声”を持つことができるとしている。また、Ogden (1986/1996) は、無意識的なところと意識的なところのあいだの関係についてのフロイトの概念化は精神分析における中心的な“弁証法的対話 dialectic”であるとした。この“弁証法的対話”とは、ふたつの対立概念の一方が他方を創造し、形を与え、保存し、否定し、さらにふたつはたがいに力動的関係にあるという過程を意味するとしたが(Ogden,1986/1996)、彼は“対話”という表現を用いることで対に生じる力動的側面を捉えようとしたのではないだろうか。他方、Muller (1999) のように、“関係の関係 a relation of relations”としてフロイトのエディプス理論を読み解き、子どもと両親それぞれとの関係が両親の関係に関係するという、間主観的な関係という第三項を取り上げたものもある。

以上のような精神分析における第三項の観点からは、“分析の第三主体”にも見られるように、患者と治療者などの対が前提とされ、第三項が患者と治療者とは独立したものとして立ち現われてくるものとされていることが窺えた。さらには、第三項自体が患者と治療者を生み出す主体性を持つという考えも見られた。

2-2. ユング心理学における第三項

ユングの心理学における基本的な第三項の考え方としては、“第三なるもの das Dritte” (Jung,1938/1989) が挙げられるだろう。Jung (1938/1989) は、数は“一”で始まるのではなく“二 die Zwei で初めて数になる”としている。というのも、“一なるものは数えることも、規定することも、認識することもできない”が、“二は、数えられない一なるものと区別される一 eine Eins を示す”からである。この、二によって生じた対立の緊張が“推移 Ablauf”に向かい、そこから生じるものとして、ユングは“第三なるもの das Dritte”を理論づけた。対立する“二”から“一”

が生じるというアイデアは、第三項の根本的な捉え方の一つであろう。また同じく Jung (1938/1989) は、“第三なるものにおいて緊張は解消し、失われていた一なるものが再び現われる”（傍点筆者）とも述べており、“第三なるもの”が基になる“一なるものと他なるもの *das Andere*”とは質を異にし、三項対立の一項としてではなく、他の“二”にある場を与えうという性質が想定されていたのではないと思われる。一方で Jung (1938/1989) は、キリスト教の三位一体について、そこに欠けている悪の原理が加わることで“四元性 *Quaternität*”という完全なものとなることを挙げ、“第三なるもの”の出現によって生じる“三元性 *Dreiheit*”を“第四のもの *das Vierte*”の欠けた不完全な、しかし同時に力動的な状態であるとも捉えていた。

もとより Jung (1921/1986) は、心理学を一番若い学問のひとつとし、“これだけが理念と物とを統合して、なおかつどちらにも暴力を加えずに済ませられる調停的科学である”と、心理学自体を一種の第三項として考えていたことが窺える。そして、ユングの理論の中でも重要な位置を占める想像 *imagination* に関しては、“内界と外界をもいきいきと結びつけているあらゆる可能性の母”であり、“客体と主体との、また外向性と内向性との両立せぬ諸要求の間に橋を懸けるのは想像であったし、今でもつねに想像である”と説明し、“想像の中においてのみ、このふたつの規制は結び合わされているのである”（Jung, 1921/1986）と、まさに対立する概念の中間に位置し、それらを結合させる第三項として想像を捉えていたことがわかるだろう。

このようなユングの考えを踏まえて、Hilman (1983/1993) は、“身体の観点（物質、自然、経験主義的なもの）と心の観点（精神、論理、観念）との間にある第三のもの（*tertium*）”として“魂”を位置付けている。また、Geigerich (1998/2000) は、ユングの理論に欠かせない“第三の要因、第三の「人」”が“魂”であるとして、“その魂はもはや二人の人間のどちらの個人的な所有物と考えられてもならず、それらを超えた独自の現実性を有していることが認められねばならない”と述べている。これらの観点から、ユングの“第三なるもの”（Jung, 1938/1989）が種々の論考の基礎としてあり、心理学の扱うものがいかに第三項的な性質を帯びているかを窺わせる。さらに、ユングの心理学では、対から生じる第三項に対し、“想像”や“魂”などの概念を与え、そこから新たな価値を見出そうとしたことが特徴と思われる。

一方で、田中 (2001) は、ユングがイメージについて、“「隙間」を開くもの、あるいは「隙間」それ自体としてのそれらの役割にはあまり自覚的ではなかったように思える”と述べ、イメージが実体化されてしまったがゆえに“本題の動きを失ってしまっていたのではないだろうか”と指摘している。この「隙間」の動きについて、“心理学は、「隙間」を埋めるものとしてだけでなく、「隙間」を開くもの、そして「隙間」それ自体として、つまり、「A でも B でもある」と「A でも B でもない」との間の弁証法的・論理的な運動として、自らを認識しえた時にはじめて、その「隙間」へと参入しようと言える。これこそが真の深層心理学の在り方なのではないだろうか”（田中、2001）と述べている。これは、ユングの分析心理学の本質に投げかけられた非常に興味深い指摘であろう。また Geigerich (1998/2000) は、神経症の治療に関して、患者と治療者の“両方の事実的な人とそれらの自己同一的な自我が円環運動という第三のものに解消されることが治療の本来的な目的であり、分裂した二人性という神経症の唯一の真なる終焉なのである”と、第三項としての“円環運動”を神経症の治療における目的に位置づけるほどに重視している。以上より、ユング心理学における第三項と呼ばれるものについては、新たな実体として捉えられるだけでなく、逆説的に「隙間」と

しでの意義に着目していくことが重要であり，“運動”を伴ってこそ，真に心理学的な意味をもたらすものになりうると考えられる。

3. 心理臨床における第三項としての「遊ぶこと」

3-1. 第三項的に見る「遊ぶこと」

以上に挙げてきた心理臨床の種々の第三項という捉え方を通して，本論のテーマである，Winnicott の「遊ぶこと」について見ていきたい。

まず，冒頭にも挙げた Winnicott (1971/1979) の言葉によれば，“精神療法は2つの遊ぶことの領域，つまり，患者の領域と治療者の領域が重なり合うことで成立する”という。ここでは，「患者の遊ぶことの領域」・「治療者の遊ぶことの領域」という対が想定されているが，これまで取り上げてきた第三項についての議論の中でも，患者・治療者をはじめ，あらゆる対により新たに生じるものを第三項として扱っていることが窺え，Winnicott (1971/1979) の言う“精神療法 psychotherapy”も一種の第三項と捉えることが可能と言えるだろう。第三項として捉えた時，精神療法は，患者と治療者という対から生じる領域であるが，両者にとっても未知である，全く新しいものとして到来すると考えられる。ここから，精神療法が予定調和的，あるいは副次的に現れるものではなく，“分析の第三主体” (Ogden, 1994/1996) の弁証法的な在りようや流動性を加味すると，いかに力動的な側面を持っているのかを捉えやすくなるのではないと思われる。

それでは，Winnicott の精神療法の基となる「遊ぶこと」について考えてみたい。Winnicott の「遊ぶこと」についての論考の中には，その特徴や性質について多角的に描いていく記述が多いが，第三項という観点から見ると，冒頭にも挙げたが，“遊ぶことは，内側 inside という言葉をどのように使っても，内側にあるのではない。(中略) また，それは外側にあるのでもない。つまり，それは個人が（どのような苦痛と困難を伴ってでも）真に外的だとして認識せざるをえないような魔術的な統制外にある拒絶された世界，すなわち自分でないものの一部ではないのである”という Winnicott (1971/1979) の記述が示唆的である。このような「遊ぶこと」の性質から連想されるのが，田中 (2001) の“「隙間」を開くもの，そして「隙間」それ自体として，つまり，「AでもBでもある」と「AでもBでもない」との間の弁証法的・論理的な運動”という心理学に対する弁証法的な論考である。Winnicott (1971/1979) は「遊ぶこと」が“場と時間をもっていること”を指摘している一方で，内側にも外側にもないとしているが，この背景には，田中 (2001) のような逆説的，弁証法的な“運動”としての「遊ぶこと」への関心があったのではないだろうか。日本語において「隙間」や「余白」を指して「遊び」ということも，ここでは無関係ではないように思われる。遊びについて哲学的に探究した Caollois (1958/1970) は，機械装置の部品の間に存在する「遊び」から発展させ，“遊びとは厳密正確のさなかに残さるべき自由を意味する”とし，“遊びということばは，こうした二つの極が存続しつづけること，両者のあいだにはある関係が保たれていること，を意味している”と述べている。この論を参考にすると，“「隙間」を開くもの，そして「隙間」それ自体” (田中，2001) としての「遊ぶこと」が，治療者・患者の関係を保ち続けるという点で非常に意義深いものであろう。さらに，Ogden (1986/1996) が“弁証法的対話”と述べたが，“対話”はまさしく対の「隙間」に生じる力動を言い表したものとも言えよう。第三項という視点から見ると，力動としての「遊ぶこと」がより鮮明に浮かび上がってくるように思われる。

ところで、Winnicott が「遊び play」ではなく、「遊ぶこと playing」と動名詞を用いている点も意義深いように思われる。彼は、“私は明確に、遊び play という名詞と、遊ぶこと playing という動名詞に意味のある区別をしている”(Winnicott, 1971/1979) と述べている。区別の根拠については明言されていないものの、これらの弁証法的な第三項としての捉え方をしていくと、彼が自らの臨床の営みにおいて重視したのは、「遊び play」という実体的なものよりもむしろ、運動、動きを伴う動名詞による「遊ぶこと playing」という表現がより適当だと思われたのではないかと考えられる。

3-2. 「遊ぶこと」の心理臨床的意義

ここまでは、第三項という観点を参照しつつ、「遊ぶこと」の性質について考察してきた。しかしながら、「遊ぶこと」の持つ臨床的特徴を十分に吟味しえていない。Winnicott の「遊ぶこと」は、実際の心理臨床においてはどのように現れ、生かされうるのだろうか。ここで改めて「遊ぶこと」という表現を追究し、第三項という観点も踏まえながら、その心理臨床的意義について検討を加えていきたい。

Winnicott (1971/1979) は“遊ぶことはそれ自体が治療である、ということを常に念頭に置いておくことは価値がある”という。つまり、「遊ぶこと」は彼の治療実践そのものを表した暗喩的な言葉であるといえる。それでは、どうして「遊ぶこと」という表現を用いたのであろうか。Winnicott (1971/1979) は精神分析、特に子どもの治療において「遊び」が解釈の対象と見なされ、マスターベーションや種々の感覚的体験との遊びの関連を考えられすぎてきたことを危惧し、“遊ぶことは、本能昇華の概念の補足として、それ自体を主題として研究される必要がある”と主張する。さらに“遊びこそが普遍的であり、健康に属するものである”、“精神分析は、自己と他者とのコミュニケーションのために、遊ぶことを高度に特殊化させた形態として発展してきたのである”と述べていることを併せて考えると、彼は「遊び」を、解釈しうる精神分析の占有物という側面ではなく、それ自体の中にある治療的な要素を重視し、「遊び」を広く捉えた上で精神分析の治療原理を理解しようとしたのではないかと考えられる。小児科医でもあった彼にとって、あえて耳馴染みの良い「遊ぶこと」という表現で治療を描くことで、当時の精神分析の解釈至上主義とも言える状況を批判していたのかもしれない。

それでは、「遊ぶこと」はいかに実際の臨床に生かされうるのであろうか。この点に関して、Winnicott (1971/1979) は事細かに理論立てて解説していない代わりに、数多くの事例を提示している。このような Winnicott の姿勢について、北山 (2004) は、Winnicott は知的に割り切りすぎることによりその価値が失われてしまう遊びの領域の守護者であろうとしたと理解している。彼の理論には子どもの臨床実践がベースとしてあることは想像されるが、“遊びの領域の守護者”(北山, 2004) として Winnicott が守ろうとした「遊び」、さらには治療の中の「遊ぶこと」とはどのようなものか、以下に具体的に考察していく。

まずは、子どもの治療に関して、Winnicott (1971/1979) が「遊ぶこと」の解説の中で挙げた 2 事例はどちらも幼児のものであった。2 歳 6 か月の男児の事例では、母親の面接に同席した男児が、母親の大腿部にプラグを差し込むような身振りをするが、母親の乳房以外どんな代替物でも我慢しなかった男児が紐を用いていた点で、紐が“分離の象徴”であると同時に“母親との結合の象徴”

であることに Winnicott は気付く。彼はこれに関しては解釈をしなかったが、男児が母に“依存したり、依存しなかったり、という潮の満ち干きに似た動きをコミュニケーションしていた”と理解し、この行為に“コミュニケーションの質を与えた”と述べている。他方の事例もこの男児の場合と同様、母親の面接に同行してきた 5 歳女児の事例である。母親は身体疾患を抱えた女児の弟について相談に来たが、Winnicott は母親の面接を行いつつ、一方で女児が 2 つのぬいぐるみを用いて妊娠、出産し、世話をした様子を細かく観察し、弟の世話をする責任を果たす面で母親に同一化できるという女児への理解を得る一方、自ら女児の遊び相手となって声掛けも行っている。このように、子どもとの面接の中では、行為として観察可能な「遊び」がクライアントと治療者の間に自然に介入する。そして、ここでの遊びが“自己を癒す種類のもの”であり、Winnicott (1971/1979) は“私は治療的なことは一切入れず、自由にふざけようと思った。子どもというのは、相手がふざけられたり、自由にふざければ、より遊びやすいものである”と述べるなど、理屈ではなく子どもが遊べるようになることを重視していたことが窺える。また、妹の誕生後に不安症状を呈した少女との面接の中では、Winnicott (1977/1980) は、時に解釈を行いつつも、少女の赤ちゃんを演じ、遊びを展開させている。“治療上重要なのは、私の才気ばしった解釈という契機でなく、子どもが自分自身を突然発見する the child surprises himself or herself という契機なのである” (Winnicott, 1971/1979) と述べているが、彼の「遊ぶこと」にはこのように、遊びを治療（あるいは解釈）に使用するというのではなく、自由に遊ぶことにおいて治療がなされるという捉え方が含まれていたと考えられる。この点は、治療における第三項として「遊ぶこと」、つまり、患者と治療者の中に「遊ぶこと」が立ち現われ、そのことが両者を患者と治療者たらしめる、という捉え方と通ずるであろう。

その一方、Winnicott (Winnicott, 1971/1979) は、“私が遊んでいる子どもについて述べることはすべて、成人に対してもそのまま現実に適用される”とし、“成人の分析においても、子どもとの作業の場合と同様、遊ぶことをはっきりと見出そうとすべきだと思う。それはたとえば、言葉の選択、声の抑揚、ユーモアのセンスなどに表れてくる”と成人の治療においても同様に「遊ぶこと」が見られることを主張している。このような成人の場合の「遊ぶこと」とは一体どのようなことを言うのであろうか。

例えば、心理療法においては幅広い年代において描画や粘土、箱庭などが使用されることがある。これらは、目に見える行いという点で子どもの「遊ぶこと」とも通ずる。Winnicott (1971/1979) の挙げた“言葉の選択、声の抑揚、ユーモアのセンス”といったものも、治療の中で観察可能な側面であるが、そこに表れる「遊ぶこと」は観察可能な行為そのものではなく、“遊ぶことという観念”と Winnicott (1971/1979) も表現しているように、観念的な性質をもったものでもあるようだ。この点について、第三項論が役立つように思われる。

言語中心の心理療法における「遊ぶこと」を検討するに当たり、第三項という観点を参照すると、その一側面として、二律背反性という特徴が挙げられるように思う。心理臨床の場には二律背反性が非常に多いことを河合 (1970) は指摘している。河合 (1970) が挙げている例として来談動機に関するものがあるが、症状や人間関係での問題等をクライアントは“よくしようと思うから受けにくる”一方、“よくしようと思うけれども、悪いままでもいい気持ちかどこかにあるからカウンセリングを受けにきている”とも言えるとしている。クライアントと対峙しながら、治療者はこのよう

な二律背反性と常に向き合っていかなければならないのであるが、ここでの難しさは、二つの対立項がクライアントにとってどちらも捨てきれぬ真実であるという点にあるように思われる。第三項的に捉えれば、ここにおいて、対立による緊迫が契機となり、第三項としての心理療法の営みが新たに生じると考えられる。「遊ぶこと」とはまさに、緊張関係にある対立項から第三項が生成される弁証法的な動きの過程、二項間の間を絶えず行き来し続けることを表しているのではないだろうか。二律背反性を備えた対は、この「遊ぶこと」という営みの中でようやく新たな第三項、つまり、対立する以上の意味を生み出すことが可能となり、ここに「遊ぶこと」の治療的意義があるように思われる。この意味において、“遊ぶことはそれ自体が治療である”(Winnicott, 1971/1979)という言葉も理解されるのではないだろうか。

3-3. 「遊ぶこと」の孕む危険性

これまで、心理療法において「遊ぶこと」がいかに治療に生かされるのかについて論じてきたが、「遊ぶこと」ができれば治療が成立する、というほど単純なものではないだろう。ここでは「遊ぶこと」という考えの孕む危険性を中心に検討していく。

「遊ぶこと」という表現はポジティブな印象を与えるものであるが、一方では北山(2004)が、精神療法において、遊びはつねに遊びではないという二面性をつきつけられるものであることを指摘しているように、「遊ぶこと」自体に二律背反の性質を孕んでいると言える。例えば、虐待を受けた子どもが激しく人形に暴力を振るい、殺すという表現は、クライアントが「遊ぶこと」によって、自身が殺されそうになった「遊びではない」ありのままの体験を治療者にコミュニケーションしているとも理解しうるし、クライアントが自殺を仄めかした時、クライアントの「死にたい」気持ちと、もう一方の「生きたい」気持ちの狭間で、治療者自身も「遊ぶこと」などできなくなるかもしれない。Winnicott (1971/1979) は「遊ぶこと」自体が治療であるとしているが、治療は決してお遊びなどではなく、時に生死をかける必死の営みである。

患者と治療者の「遊ぶことの領域」を重ね合わせることが精神療法の基本であるならば、治療者としては患者の「遊ぶことの領域」の在りようを見立てておくことは重要だと思われる。この「遊ぶことの領域」を逸脱してしまえば、治療としての「遊ぶこと」を越えて、患者は自身の攻撃性や破壊性に自らを滅ぼしてしまう危険すらあるのではないだろうか。北山(2004)も、治療者は「遊ぶことに伴う可能性のある度を超した不安といきすぎた身体的興奮、さらに本能的に満足しきったときの自失の脅威から、患者を守らねばなら」ず、“患者が「興奮のるつぼ」へと誘い込まれることをコントロールせねばならない”と指摘する。第三項としての「遊ぶこと」を考えた時に、治療の中では大変活発に逆説的、弁証法的な動きが生じているといえる。それゆえにこそ創造性に富む展開も起こりうるが、それと同時に、この動き自体に患者も治療者も巻き込まれてしまう危険性について治療者は自覚的である必要があろう。Jung (1938/1989) が“第四のもの”について論考したが、この点からも、「遊ぶこと」という第三項が生じている状態、つまり“三元性”は、力動的であると同時に不完全で不安定な状態であるということもいえる。

もとより、「遊び」というものに対しては、非常に厳格な側面があることが指摘されている。Huizinga (1938/1973) は遊びとは第一に“「自由な」もの”、第二に“日常生活から、ある一時的な活動の領域へと踏み出してゆくもの”、そして日常生活から、その場と時間とによって区別される

“完結性と限定性が遊びの第三の特徴を形づくる”とし、Caillois (1958/1970) も、“すべて遊びは規則の体系である。規則は、何が遊びであり何が遊びでないか、すなわち、許されるものと禁じられるものとを決定する。この取りきめは恣意的であり、同時に強制的であり、決定的である。それは、いかなる口実があろうと破られてはならない。(中略) なぜなら、遊ぶという欲望、つまり遊びの規則を守ろうという意志によってだけ、規則は維持されているからである”という。このような論考は、“自由であると同時に保護された一つのある空間”(Kalf, 1966/1999) など、心理療法の枠組みに関する理論に通じるところがある。Winnicott (1971/1979) もいうように、「遊ぶこと」は“場と時間”をもつ行いであり、それらの枠があることで初めて「遊ぶこと」が治療に生かされるのではないだろうか。治療者が患者に制限をかけると同時に患者を守ることは、「遊ぶこと」の文脈においても治療の基盤となるといえる。Winnicott (1971/1979) が治療論の中で、“治療者が遊べないとしたら、その人は精神療法に適していない”とまで述べるのは、子どもと自由に「遊ぶこと」ができない場合のみを指しているのでは決していないだろう。心理臨床において「遊ぶこと」とはどのようなことであるかを体験的に把握し、患者の「遊ぶことの領域」について十分に見立てた上で、自らの「遊ぶことの領域」と患者のそれとを重ね合わせるという大変な営みを共にしていくことの責任の大きさや覚悟の必要性を踏まえた示唆であったのではないかとと思われる。

4. おわりに

本論において、第三項として Winnicott の「遊ぶこと」を捉え直す過程で浮かび上がってきた特徴やその意義に加えて、「遊ぶこと」の危険性等、その限界についても考察してきた。

「遊ぶこと」という考えは、心理臨床の実践に新たな切り口を与える画期的な視点であったと言えるだろう。松木 (2001) によれば、Winnicott 自身が、他の分析家から“ピーターパン”、つまり、永遠の少年と称されていたといい、「遊ぶこと」というテーマは、Winnicott 自身の象徴とも言えるテーマなのだろうと思われる。Winnicott の「遊ぶこと」に関する記述は曖昧な点も多く難解であり、多少ポジティブな側面に傾倒しがちである印象を与えるが、大変含蓄の多いテーマである。今回は、第三項という観点を通して考察をしてきたが、他の観点から切り込むことでまた新たな価値が見出されるかもしれないと感じる。「遊ぶこと」は心理臨床に今後も多くの示唆を与えることだろう。

文献

- Caillois, R. (1958) : *Les jeux et les homes*. Gallimard. 清水幾太郎・霧生和夫 (訳) (1970) : 遊びと人間. 岩波書店.
- Freud, S. (1919) : *Das Unheimliche*. 藤野寛 (訳) (2006) : 不気味なもの. フロイト全集 17, p1-52. 岩波書店.
- 藤山直樹 (2001) : ものが単なるものでなくなること—わからないこと、生きていること、開かれること—. 精神分析研究, 45, 18-24.

- Giegerich, W. (1998) : *The Soul's Logical Life*. Frankfurt et al: Peter Lang. 河合俊雄・北口雄一・猪股剛 (訳) (2000) : 魂と歴史性 ユング心理学の展開 (ギーゲリッヒ論集) 1. 日本評論社.
- Hilman, J. (1983) : *Archetypal psychology: a brief account: together with a complete checklist of works*. Spring Publications. 河合俊雄 (訳) (1993) : 元型的心理学. 青土社.
- Huizinga, J. (1938) . *Homo ludens*. Haarlem : Tjeenk Willink & Zoon. 高橋英夫 (訳) (1973) : ホモ・ルーデンス. 中央公論新社.
- Jung, C.G. (1921) : *Psychologische Typen*. Zurich: Rascher. 高橋義孝・森川俊夫・佐藤正樹 (訳) (1986) : 心理学的類型 I. 人文書院.
- Jung, C.G. (1938) : *Psychology and Religion*. Yale University Press, New Haven and London. 村本詔司 (訳) (1989) : 心理学と宗教. 人文書院.
- Kalff, D.M. (1966) : *SANDSPIEL. Seine therapeutische Wirkung auf die Psyche*. Ernst Reinhardt Verlag München Basel. 大原貢, 山下美樹 (訳) (1999) : カルフ箱庭療法 新版. 誠信書房.
- 河合隼雄 (1970) : カウンセリングの実際問題. 誠信書房.
- 北山修 (2004) : 錯覚と脱錯覚: ウィニコットの臨床感覚. 岩崎学術出版社.
- 松木邦弘 (2001) : クラインの二人の分析的息子たち—ウィニコットとビオンの場合—. 精神分析研究, **45**, 140-151.
- Muller, J.P. (1999) : The Third as Holding the Dyad: Commentary on Paper by Margaret Crastnopol. *Psychoanalytic Dialogues*, **9**, 471-480.
- Ogden, T.H. (1986) : *The Matrix of the Mind, object relations and the psychoanalytic dialogue*. UK: Jason Aronson Inc. 狩野力八郎 (監訳) (1996) : こころのマトリックス 対象関係論との対話. 岩崎学術出版社.
- Ogden, T.H. (1994) : *Subjects of Analysis*. Jason Aronson Inc. 和田秀樹 (訳) (1996) : 「あいだ」の空間—精神分析の第三主体—. 新評論.
- 田中康裕 (2001) : 魂のロジック ユング心理学の神経症とその概念構成をめぐって. 日本評論社.
- 和田秀樹 (1996) : 訳者イントロダクション. Ogden, T.H. (1994) : *Subjects of Analysis*. Jason Aronson Inc. 和田秀樹 (訳) (1996) : 「あいだ」の空間—精神分析の第三主体—. p16-17. 新評論.
- Winnicott, D.W. (1971) : *Playing and Reality*. Tavistock Publications Ltd, London. 橋本雅雄 (訳) (1979) : 遊ぶことと現実. 岩崎学術出版社.
- Winnicott, D.W. (1977) : *The Piggle: An Account of the Psychoanalytic Treatment of a Little Girl*. The Hogarth Press Ltd, London. 猪股丈二・前田陽子 (訳) (1980) : ビグル 分析医の治療ノート. 星和書店.

(心理臨床学講座 博士後期課程 1 回生)

(受稿 2013 年 9 月 2 日、改稿 2013 年 11 月 28 日、受理 2014 年 1 月 16 日)

A Study about “Playing” in Clinical Psychology: From the Viewpoint of the Third

MINAMOTO Asami

This paper aims to examine Winnicott’s idea of “playing” from certain points of view about “the third” in clinical psychology, and consider its meanings and limitations. First, I investigated some studies about the third, such as “the analytic third,” Ogden’s psychoanalytic idea, or “das Dritte,” Jung’s idea. Their basic idea is that a pair creates the third. Moreover, some ideas emphasize that the third is not only a subject but also a crevice itself between a pair, and then dialectic motions arise there. Winnicott’s psychotherapy is considered to be “the third” in that it takes place in the overlap between two areas of playing, that of the patient and that of the therapist. “Playing” is also considered to be “the third” because it is not inside, nor is it outside; in other words, it indicates a quality as a crevice and the dynamism there. I discuss the various aspects of “playing” through some clinical topics such as antinomy. On the other hand, I point out that “playing” also has some limitations. It is suggested that some restriction, for example, on time and space, is essential for “playing.”